

遠距離介護が、見えてくる子づくり親づくり

—パオッコ活動現場より—

NPO法人パオッコ「離れて暮らす親のケアを考える会」 太田差恵子

夏の終わりに東北を訪れる機会がありました。

8月下旬には青森県八戸圏定住自立推進事業での認知症フォーラム。「もし、認知症になっても大丈夫！」別々に暮らす親子の心構え」というタイトルで、基調講演をさせて頂きました。後半は、パネルディスカッションでコーディネイト役。

登壇者は認知症を専門とする医師、消費者被害について詳しい弁護士、そして車の運転などについて警察の方。本誌での私の記事を読んだという地域包括支援センターの担当者が、約1年前に連絡をくださいました。

「認知症」というとその症状にのみ目を向けがちですが、生活

なものでした。278人の方が参加くださいました。

東京で暮らしていると、東日本大震災での八戸での被災状況がよくわからず、4月頃には開催されるのかしら、と当地の様子を心配していました。地域包括支援センターの担当者は、パワフルでした。

認知症フォーラムの前夜には、急きよ「岩手県大槌町吉里吉里地区で唯一生き残った社会福祉法人堤福社から」というテーマで特別講演会を開催されました。震災を振り返ってから、認

知症フォーラムを行いたいという地域包括の担当の強い意向だったようです。「大震災そのとき、認知症の人とその家族、ケアスタッフは、生きるためにどう動いたか」。おもに、専門職の方向けでしたが、参加させていただきました。

特別養護老人ホーム「らふたあヒルズ」の施設長とスタッフが、震災後復興で大変ななか、岩手から八戸に駆け付けてくださいました。そのとき、施設は戦場のようだったといいます。ひとことで片づけてしまうと、あまりに申し訳ない気持ちになります。スタッフのひとりには親族が行方不明のままと言っておられました。それでも「生き残った者の責任」として、必死で高齢者を支えてこられたようです。施設長が「まだまだ復興どころか、復旧の『ふ』の字にも至っていない」とおっしゃったのが印象的でした。

その2週間後、大学院のゼミ合宿で岩手に行き、吉里吉里地区もバスで通りました。街だっ

しょう。離れて暮らす子は「歳だから」という言葉で親の病気を認めないケースが少なくないそうです。そんな場合、医師は「1週間、一緒に生活してみてください」と話すといえます。

パオッコの会員からもよく聞くのですが、「認知症」を疑った場合、どうやって専門医につれていくかも問題となります。とりあえず内科や整形外科など、かかりつけの医師に相談し、専門医を紹介してもらうことも方法だとのこと。ただ、他科の医師には認知症についての知識に乏しい方がいるのも確か。初顔合わせの医師に離れて暮らす子が相談しても、話がスムーズにいかない場合もあります。日頃

たところは何も無い。あちこちにガレキ。たまたま私たちを案内してくださった三陸鉄道の担当者も大槌町出身で、震災後は毎週末、実家に戻り片づけに追われたといいます。最初に大槌町に入った時は、嘔然としたそうです。火事で焼け誰だか分からないご遺体があちらにも、こちらにも。今もご親族は仮設住宅に入っておられるそうです。

バスでお話してくださいました。最中、彼の携帯が鳴りました。警察から、ご遺体のDNA鑑定への協力要請だったそうです。9月15日現在、死者1万5778人、行方不明者4057人。まだまだ行方不明者の捜索が続いています。

八戸でお話をしてくださいました「らふたあヒルズ」のスタッフ、三陸鉄道の方ともに、知り合いやご親族にお亡くなりになった方や行方不明のお知り合いが多いくらいっしやるというのに、笑顔で「前」を向いておられることが印象的でした。

青森県八戸圏定住自立推進事

から、離れて暮らしていてもコミュニケーションが必要だといえるでしょう。

一方、悪徳業者は日本の隅々までいて、高齢者を騙そうと手ぐすね引いているように日頃から感じているのですが、八戸でも「同様です」と弁護士。会場から「金銭管理が難しい親族に注意をしても、聞く耳を持たない」といった声も出ていました。確かに、自尊心を傷つけないよう忠告をするのは難しいことです。それは親に限らず、きょうだいや地域の人も同様です。警察の方からは、運転免許の返納について話が及びました。これも同じく、自尊心を傷つけないよう返納させるのは難しいことです。交通の便が悪いと一層問題となります。

残念ながら、介護に正解はありません。けれども、地域包括支援センターを中心に、会場の「家族」や「地域住民」、そしてさまざまな専門職が一緒になって「認知症」について考えた今回のフォーラムはとても有意義

業での認知症フォーラムに参加された方にも、そういった方はおられたことでしょうか。それでも前を向いて生きていかなければいけない。また、そんな地域にからだがか不自由な方や、認知症の方もたくさんいることを忘れてはいけないのだと思えました。そして、その方々をケアする家族や専門職の方々も必死で前を向いてやっている。

そんななか、台風12号により紀伊半島で多くの命が奪われました。自然は素晴らしいですが、恐ろしい。共存していくには、お年寄りの知恵（たとえば津波がきたらとにかく逃げるなど）の語り継がれる大切なのだとしてみじみと思いました。

10月は秋田県庁での「働きながら介護を続ける方法」というテーマで講演に伺います。家族がうまくコミュニケーションをとりながら、専門職や地域も一緒になってからだの不自由な方を支えていくことが、都会、地方を問わず必要となってきたのでしよう。

NPO法人パオッコ

～離れて暮らす親のケアを考える会～

親世代はできることなら生涯、住み慣れた家で住まい続けたいと望み、子世代も仕事や子どもの教育などを考えると、故郷に戻ることは容易ではありません。そんな状況のなか、親の心身に衰えが生じると子世代はどうしたものかと悩みます。パオッコは「ひとりの経験はきっとみんなの役に立つ」という理念のもと、情報や体験を共有。ぜひ、ホームページに遊びにきてください！

〒113-0033 東京都文京区本郷3-37-8
本郷春木町ビル9F インキューションハウス内
ホームページ <http://paokko.org>